

私たちは地球温暖化の問題をどのように捉え、  
その解決のために何をしたらよいのか？

東京大学教授の江守正多氏に聞く

2023年7月の国連本部での最新の報告書の発表に際し、国連事務総長であるアントニオ・グテーレス氏は、「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した。」と記者団に語り、劇的かつ早急な気候アクションの必要性を訴えたと言われています。

地球温暖化や気候変動という長期的で広範囲に及ぶ問題を、私たちはどのように捉え、その解決のために何をしていけばよいのか？地球温暖化について15年以上前から警笛を鳴らし続けてきた気候科学者の江守正多さんに、地球温暖化の状況やそのための対策について、世田谷区環境政策部の職員がお話を伺いました。

江守さんは、本年3月までは、上級主席研究員として国立環境研究所にも所属し、長年、地球温暖化のシミュレーションに関する研究に取り組み、気候危機の時代における諸課題を科学と社会の両面から探求されています。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第5次および第6次評価報告書の執筆にも関わられた日本を代表する科学者です。

【聞き手：世田谷区環境政策部職員】

話者プロフィール：



江守正多さん  
東京大学・未来ビジョン研究センター教授

2024年3月まで国立環境研究所・上級主席研究員を兼務。1970年神奈川県生まれ。1997年に東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程にて博士号（学術）を取得後、国立環境研究所に勤務。同研

究所 地球システム領域 副領域長、社会対話・協働推進室長等を経て、2022年より現職。専門は気候科学。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第5次および第6次評価報告書 主執筆者。著書に「異常気象と人類の選択」「地球温暖化の予測は『正しい』か?」、共著書に「地球温暖化はどれくらい『怖い』か?」「温暖化論のホンネ」、監修に「最近、地球が暑くてクマってます。」、監訳に「ドローダウン—地球温暖化を逆転させる100の方法」、**「リジェネレーション[再生]—気候危機を今の世代で終わらせる」**など。

※本ページの巻末に、江守さんが関わった解説動画と書籍情報をまとめました。

子供や大人向けにとっても分かりやすくまとめられたものもあります。ぜひご覧ください。

## 近年、確実に温暖化は科学者が予想していた通りに進んできた。

Q（区職員）江守先生は、単著としては15年ほど前に「地球温暖化の予測は「正しい」か?～不確かな未来に科学が挑む～」を初めて執筆され、これ以降も、子供向けの絵本や各種書籍の執筆や監修・監訳などにも関わられていらっしゃいます。この間、様々な経済活動が行われ、温暖化のシミュレーション技術の精度の向上もあったと思いますが、こうしたことも踏まえ、温暖化の状況を今どのように捉えていらっしゃるか。また、近未来の10～20年後、あるいは今世紀末の2100年という時点で温暖化をどのように捉えることができるかを、改めてお伺いしたいです。

### 江守さん

まず大前提として、世界平均気温は産業革命前から1°Cちょっと上がっており、これを1.5°Cで止めようという話をしています。その原因が人間活動による温室効果ガスの排出であることは疑う余地がありません。この排出量が、ずっと増えてきて未だ減少に転じていません。

近年の10年、20年ということ言うと、やはり、確実に温暖化は予想された通りに進んできたなという感じです。

と言いますのは、2000年代に入った頃からしばらく世界平均気温はあまりあがっているように見えなかったのです。それで、温暖化していると思いたくない人は「温暖化が止まった」と強調していた。

気候科学者はそのうちまた上がるはずだと思っていたわけですが、案の定2016年にはかなりはっきりと上がって、また最近はっきりと上がった。特に昨年（2023年）はとても記録的でしたよね。

つまりこれは、気候というのは、温室効果ガスの影響では、長期的な上昇傾向というものが決まるわけですが、年々どうなるかは自然の変動があり、それが重なっていて、年によってはあまり上がらないが、年によってはすごく上がるということを繰り返すわけです。

それを科学者はわかっているわけですが、わからずに見ていると、「最近上がっていないじゃないか」というところに注目すればそのように見えるし、でもまた上がった、でもまたしばらく上がらないね、いやまた上がった、ということになる。傾向としては、科学者が予測していた通りに上がったということ

が、この20年くらい起きていたことだと思います。

特に昨年の記録的な高温は専門家にとっても非常にショックなことでありまして、これはエルニーニョ現象が一つの要因だといわれていますが、それがとても強いわけではなくて、他にも色々なことがいくつか重なり、過去の記録をびっくりするくらい上回るような記録が出てしまった、ということです。



**氷期と間氷期で地球の平均気温は 6°C 違い、海面レベルでは 120m の差がある。産業革命前に比べ、人類はすでに平均気温を 1°C 以上、人為的に上げてしまっている。**

江守さん

どのように表現すれば人々にわかりやすく伝わるのかわからないのですが、たとえば「過去 10 万年になかった高温である」とか言います。10 万年という数字を聞いただけではピンとこないかもしれませんが、なにしろ、ひどい状況な訳です。

世界平均気温が 1°C 上がるといってもピンとこないと思うのですが、例えば、昔 2 万年くらい前に「氷河期」がありましたね。とても寒く氷がいっぱいあった地球だったというのは聞いたことがあると思いますが、それは氷期と間氷期といって天文学的にそのような状況が繰り返し起きます。

今は間氷期で、この間氷期はあと 5 万年くらい続くということもわかっているのですが、何しろ、地球の寒い時期と比べたときに、世界平均気温だと氷期と間氷期※の差はどのくらいあったのかを調べると 6°C くらいなのです。

※「氷期（寒冷期）と間氷期（温暖期）」についての解説

（国立環境研究所地球環境研究センター）

[https://www.cger.nies.go.jp/ja/library/qa/24/24-2/qa\\_24-2-j.html](https://www.cger.nies.go.jp/ja/library/qa/24/24-2/qa_24-2-j.html)

世界平均気温で6°C違うと、海面は120mくらい違うのです。120メートルですよ。120センチではないですよ。それくらい違う気候なのです。グリーンランドとか、今氷がありますが、氷期には今のカナダや北欧のあたりはすべて氷だったのです。グリーンランドのような氷が乗っかっていたわけです。その状態の気温が今と比べて6°C寒いだけなのです。

それを今人間は逆向きに1°C上げているわけで、ほっておくとこれが2°C、3°C上がるわけです。世界平均気温で1°C上がるということは、科学者からみると、とんでもないことなのです。

日常の感覚だと、日々の気温の変動や朝晩の気温の変動は10°C、20°C変わってしまうわけなので、それに比べて1°Cと言われてもピンとこないですよ。なので、どう言ったらピンと来るか分からないのですが、科学者から見ると、ちょっととんでもない状況なのだということを分かって欲しいのです。

## **2021年の政府間パネル（IPCC）第6次報告書では人間活動が温暖化の主な原因であることは“疑う余地がない”とされた。**

江守さん

それで、地球温暖化予測のシミュレーションの精度の向上はもちろんあります。コンピューターの能力も年々良くなり、より計算が沢山早くできるようになりました。カメラの画素数が上がるみたいに、解像度がより細かく計算することができるとか、色々なシミュレーションの方程式をより現実に近いように改良したり、そうしたことが色々行われてきている。それでシミュレーションがよくなり色々わかるようになった面もありますが、温暖化が人間活動のせいであることがわかってきたのは、現実の温暖化そのものが進んできて、非常にはっきりしてきたということが大きい気がします。

20年前ということ言うと、IPCCの第三次報告書が2001年に出て、その時には「人間活動が温暖化の主な原因である“可能性が高い”」と言っていたのです。それが、2007年の報告書では“可能性が非常に高い”、2013年の報告書では“可能性が極めて高い”となり、今回出た最新の第6次報告書（2021年）では“疑う余地がない”となった。それは、科学の進歩はもちろんあるのですが、現実の温暖化がその間みるみるうちにはっきりと進んできたということです。その状況が、“温暖化が人間活動で起きているということは、どう考えても疑いようがない”という認識を進めてきたということかなと思います。

## **今世紀末にはこのままいくと氷期と間氷期の温度差6°C（海面レベルでは120m差）の半分弱の2.5°Cの温暖化が予想される。ただし、あきらめない限り可能性はある。**

江守さん

将来ということ言いますとね、これも今、世界の排出量は減り始めてはいなくて、これからそれなりに減っていくとしても、今くらいのペースでいくと、今世紀末には2.5°Cくらい上がるといわれていますよ。

2.5°C温暖化すると、先ほど言ったように、氷期と間氷期の半分弱くらい上がってしまう訳ですよ。なので、結構すごいということと、いわゆるティッピングポイント※というのが色々あるのですが、グリーンランドの氷が解けるのが止まらなくなったりとか、南極の氷が流れだすのが止まらなくなったりとか、そういう「臨界点」ですね、この点を超えると、後戻りできない急激な変化が始まるだろうといわれている温度を、いくつか超えてしまう可能性がかなり上がってきますね。2.5°Cという温度上昇ですとね。

※ティッピングポイント (tipping point) :

それまで小さく変化していたある物事が、突然急激に変化する「転換点」や「臨界点」を意味する。気候変動問題においては、このティッピングポイントを過ぎると、気候変動が一気に進む恐れがあることが指摘されている。

本当にその手前で止めなきゃということ、今頑張っている訳ですけども、だんだんそれらを超えてしまうということが現実味を帯びてきているというのが今の状況だと思います。

それは、このままただら行くとそうなるということであって、当然、今、社会のシステムを温室効果ガスが出ないように変えていこうとしている訳なので、これを我々があきらめない限り、そうならない可能性は残っている。1.5°Cで止まるかというのは、もう甚だ心もとなくなっているのですけれども、仮にそれがだめでも、1.6°Cとか 1.7°Cとか、何しろ 0.1°Cでも低く温暖化を止めるという可能性を、我々は目指しているところだと思っています。

## 温暖化による異常気象と国際秩序の不安定化の心配

Q (区職員) 2030年時点と2050年時点で日常的に生活している人にとってどのような状況変化があるのでしょうか?

江守さん

日常的にはもちろん、すでに起きているような猛暑で熱中症により沢山の人が病院に運ばれるとか、大雨が降るとか。大雨も直撃すると大変ですからね。世田谷はわかりませんが、2019年の台風19号では多摩川は少し溢れた。荒川はぎりぎりセーフでしたが、溢れていたらきっと大変なことになっていた。みたいなことがすでに起きているわけですよ。なので、ちょっと熱いのを我慢しなくちゃいけないとか、そういうレベルの話ではなくなってきましたよね。

僕がすごく心配しているのは、やはり温暖化が進むことによって、国際秩序が不安定になるというか、難民が沢山出てくるとかですね、それによって色々な国際関係が悪化することです。今すでに国際関係はいろいろ悪化しているので、それに人々は慣れてしまっている部分があるかもしれませんが、それによってある種、部分的に起きているように、エネルギーや食糧などの国際的な調達というか貿易が影響を受けるし、今みたいにエネルギー価格が高くなるとか、場合によっては食料がすごく高くなるとか、

そういうことが今後どんどん心配になってくると思います。

Q（区職員）温暖化というのは影響が出るのは 2100 年といったように、とても長期的なスパンの話です。日常生活の中では、台風の強さや夏の暑さの度合いが年を追うごとに高くなるのは確実であるが、2030 年と 2050 年の違いを明確にいうということはなかなか難しいということですね

江守さん

そうですね。



**たばこの分煙化のように、社会のシステムを変えることが必要であり、そのためには、関心を持つ人から行動を起こしていくことが重要**

Q（区職員）地球温暖化の対策はまだまだ足りていない状況があると思います。江守先生がとても重たい課題と認識されていることが、まだ世間に十分に浸透していないということですね。気候変動問題は、多種多様な人間活動からなり、長期的なものです。これを俯瞰的に見てコントロールできる主体を社会がどう形成できるのか、とても大きな課題だと思いますが、いかがでしょうか。

江守さん

僕は、この課題というのはできるだけ多くの人に理解してもらって考えて欲しいと思っていますけれども、世の中の大多数の人が、非常に優先度高くこういう問題を考えるという状況というのは起きにくいと思っています。それはそういうものだと、ある意味しょうがないと思っています。

やはり気候変動の問題というのはおっしゃるように長期的だし、抽象的かもしれないし、自分が何かしてもどうにかなるような気は全然しないです。ちょっとそういう話を聞くとその時は「そういうのは大変ですよ」という感じにはなるけれども、人々は日常の生活で他にも色々と考えなければならないことがあるので、そこまで優先度高くこの問題を考えられない、というのは普通感覚ですよ。

それはそういうものだと思うのです。そのような中で社会のシステムを変えていくにはどうしたらよいか、という話なのですね。

僕は、よく以前から話をしているのは、例えば、たばこの常識が変わった。分煙が今は当たり前になっています。

昔はこのような部屋があれば、こんなところに必ず灰皿があって、たばこを吸いながら話をしていたと思うのです。つい30年前くらいの話ですよ。今は考えられないわけですね。

それは大きく常識が変わっただけで、変わるにあたって社会の大多数の人たちが、例えば受動喫煙の健康被害のことをよく知っていたからという訳ではなく、一部の人がそういうことが大事だと思って活動をして常識を変えていったのだと思うのです。

## 皆が関心をもたないと変わらないと置いていたら、この問題は解決しない

江守さん

多くの人というのは知らないうちに常識が変わり、それについて行くという感じになると思うのです。そこでは関心を持った人が変えているのです。そして、関心を持とうと思えば、誰でも関心を持てるわけですよ。だから、だれかエリートが勝手に変えていると思ったとしたら、自分も関心をもってどう変えるかという議論に加わればいいのであって。多分そういうものだと思うのですね。

僕自身は気候変動問題に関しては仕事なので、色々知っていて、こういう風に皆さんに理解してほしいという顔をしてしゃべっていますが、他の社会課題に対しては全部知っているわけではないので、むしろ僕の知らないうちに、関心を持った人が取り組んでいて、社会が変わって、僕がそれについて行けばよいと思っているのです。そういうものではないかな、と思いますね。

だから関心を持つ人は多いほどもちろん良いし、深く関心をもってくれる人がさらに出てくるのがよいですけど、皆が関心をもたないと変わらないと置いていたら、この問題は解決しないですね。そんな認識でいます。

## 世界のルールは変わり始めている

Q（区職員） 諸外国の取組みの状況を踏まえたときに、再生可能エネルギーの活用を含めて、今の日本の取組み状況をどのように捉えていらっしゃいますでしょうか？

江守さん

世界の方が早く動いていて、日本はそれについて行かなくちゃいけない状況だと思います。世界にも色々な国がありますけれども、ヨーロッパとか、アメリカのリベラルな州などに比べると、日本は全く

考え方が遅れている訳ですよ。もちろん色々な国にも色々な認識の人が住んでいると思いますけれども。

だから、世界のルールは変わり始めているのです。それに人並について行った方が良いのではないか、ということが起きている気がしています。

日本がいつまでも化石燃料を使い続けていると、例えば今年のG7ではその面に関しては少なくともリーダーシップは取れていない。議長国であるにも関わらず何かちょっと変なことを言っているみたいな風に見える状況になってしまっている。それを少なくとも世界並みのところまでは、まずやらなければならないのではないか。ということが、今のステージのような気がしています。

## **対策の進んでいる国の市民は、政治に働きかけ社会を変えるアプローチをとっている。**

Q（区職員）他の世界で対策が進んでいる国というのは、やはり市民で熱心な方が、一生懸命活動して合意形成を取って進めている感じを受けていますでしょうか？

江守さん

それもあると思いますけど、日本でイメージしているみたいに、市民みんながエコな生活をしているというよりは、政治に働きかけているのではないのでしょうか。だから、本気で社会を変えようと思ったら、自分の生活をちょっと変えるくらいではだめで、政治からアプローチしてもらって、ルールを変えて、それで社会全体を変えていかないといけないと理解している人たち。また、そういう行動の仕方を知っている人たちが日本より多くいるのだと思います。

日本でも地球温暖化は心配ですか？と聞くと、8～9割の人が心配ですよという訳ですよ。だけどそれが、日本の場合は政治的な要求につながらない。心配だからこれを止めてくれるように、そういう政治家を選ばないといけないとか、そういうルールをつくるために何かプレッシャーをかけなければいけないとか、そういう発想にはほとんどの人はならないわけですけども、ヨーロッパなどだとそういう発想で動く人がもっと多いのではないのでしょうか？

Q（区職員）ひとつの自治体として率先して動くことが、ほかの自治体にも影響を及ぼし、世界に広がっていくようなケースもあるのでしょうか？

もちろんありますよね。それはぜひ。世界をリードできるかどうかはともかくとして、日本をリードするというのは、やる気のある自治体はどンドンリードして行ってほしいですよ。それはぜひ世田谷区にそうやっていただきたいと思いますよね。



Q（区職員）住宅都市としての世田谷の場合、人口が多いので「再生可能エネルギー電力」を皆で選択するというのも一つの大きなインパクトある取り組みになると考えられそうでしょうか？

江守さん

そうですね。

ただ、一つ注意が必要なのは、再生可能エネルギーのプランの電力を契約すると、自分が使っている電気では二酸化炭素が出ていないことにはなりますが、自分がそれまで使っていた二酸化炭素の出る電気を他の誰かが使うので、日本全体ではその瞬間に排出量が減るわけではないですよ。自分の庭先だけきれいにしているみたいにもみえます。

じゃあ意味が無いのかということではなくて、やはり多くの人が再生可能エネルギーの電気を使いたいという状況になることで、再生可能エネルギーの普及に取り組んでいる事業者の収益が上がり、投資が増えることになっていきますので、再生可能エネルギーが増えて、それで初めて排出量が減ると。そこは一応理解しておく必要があるかなと思います。



若い人に対するインフルエンサー的な立場の人がもっと出てこないかと思っている

Q（区職員）子ども若者に対する環境啓発について、どんな取り組みをやるとよいか。あるいは面白い取り組みがあれば教えていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

江守さん

いつも思っているのは、日本だと、気候変動に心底熱心に取り組んでいる有名人って思い浮かばないじゃ

ないですか。例えば、アメリカだと、レオナルド・ディカプリオなどがいて、アカデミー賞のスピーチで気候変動の話をしたりする訳ですよ。

そういう人って、日本で思いつかないですよ。最近ちょっとSDGsに力を入れる芸人やタレントが出てきていますが、そういう人でもよいので、セレブリティ（有名・著名な）というか、本気でそういう問題に関心をもつ若い人に対するインフルエンサー的な立場の人がもっと出てこないかと思っているのですよ。

クライメイトライブ（音楽を通じて気候変動の認知と行動を促す取組み）というのを聞いたことはありますか？音楽のライブなのですが、これをはじめたのがイギリスで、クイーンのブライアン・メイが高校生から「気候変動が大変なので手伝ってください」という手紙をもらい、「じゃあライブをやるか。」ということで始まったらしいです。

クライメイトライブが世界の色々なところで行われ、日本でもそれをやっている人がいる。コロナだったこともあって、そんなに大注目されていないのですが、2～3回やっていると思います。

## 民主主義のアップデートとしての気候市民会議

Q（区職員）江守先生は、気候市民会議に関わっていらっしやったかと思いますが、先ほどの政治に働きかけるという話にもなると思いますが、世界市民会議で各国の市民に対し「気候変動に対してどのように認識をもっていますか？」と聞いたときに、気候変動対策をやることは生活の質の向上につながると言っているのが世界の潮流なのに、日本では低くて、むしろ自分の生活の制限になるという認識が多い。先ほどの話ともつながっていると思っていて、やはり誰か何とかしてくれよ、という気持ちがあるのかなと思われます。また、自分で何とかしようと思っても無力感があるとも思います。民主主義のアップデートといえますか、自分のあげた声が政治に直結する取り組みも一方でいるのかなとも思います。実際に江守先生が関わられたときの実感として、気候市民会議がなにがしかの民主主義の回路が次の段階に行くような何かにはつながったような実感はお持ちでしょうか？

### 江守さん

それはすごくありますね。東京23区では、杉並区が今度やると思いますが、武蔵野市、多摩市、日野市、茨城県つくば市、神奈川県厚木市の[気候市民会議](#)にはこれまで関わってきました。気候市民会議は無作為抽出の市民に、専門家が情報提供して議論してもらい、ミニパブリックスと言って、社会の縮図になるようにサンプリングするところに特徴があります。

普段あまり話したことがないような世代であるとか、職種であるとか。まあ世代が大きいですかね。同じグループに入ってたたとえば高校生とお年寄りが電気自動車をどうしようか、というような話をするわけですよ。それは、どこの会場をみても非常に議論に活気があるわけですね。そういう今まで話したことがない人と話をするという経験をいきいきと市民がやるということがまず観察できますね。

また、僕がちょっと思ったのは、例えば、市民の提案が出てきましたと。その提案は自治体の職員も思いついていたかもしれない。だけど、職員は忙しいし、ステークホルダーに説明することや議会を通すことは大変だし、重い腰を上げてやるほどのことでは無かったとするじゃないですか。そういうことでも、市民の提案として意見がでると、では市民が言っているからやるかと、動くような面もあるかもしれないですし。

そうすると参加した市民はとてもやりがいを感じるでしょうし、参加しなかった人も、そういう会議をやっていることを認識した市民は、自分は選ばれなかったけど自分たちの代表が直接議論して提案して、それが実現するのだと思えば、ちょっとした良い体験になると思います。ぜひ世田谷区でも！

**新たなルールを作りこれまでの常識を変えることが大事。市民の役割として、そういうルールができることに賛成する、あるいは作るべきだと声をあげることが必要。**

Q（区職員）難しいのは、社会では市民も各種団体も自分たちの都合で活動しています。一方で、地球の環境問題は、全体のひとつのことなので、それをいかに共通認識として持ち、それぞれできる立場でできることに取り組んでいくことが必要と思います。まず認識してもらうことと、認識してもらった上で、具体的な行動に移してもらうということが、とても難しい問題だと思っています。

江守さん

先ほども言ったように、みんながそれを共通認識として持って、自分でできることをそれぞれに考えてやるということは、自主的には起きないと僕は思っているので、やはりルールができるというのがすごく大事で。先ほどのたばこの話にしても、健康増進法ができて、最初は努力義務でしたけど、規制されて常識が変わったということが起きた。多くの人にとっては、そういう問題だったわけですね。

今回も、東京都の太陽光パネルの条例などは非常に良い例だと思っています。そのようなときに、市民にできることというのは、やはり政策を支持すること。太陽光パネルの条例に賛成しますという人が、多く現れたことが大事だったと思います。

それでルールが変われば、皆が変われるわけなので。今まで関心がなかった人も、新築の住宅を建てれば、ほぼ太陽光パネルを載せることになるので。それで載せてみたら、これはやはり良かったね、ということに多分なるのだと思います。

最初はみんな載せなくてはいけなくなったから載せるのでも、電気代高くなってもうちは発電しているから心配ないし、とだんだんなくなってって、そのうち載せるのが当たり前になるので。その変化を起こすことがやはり大事なのだと思っています。

それを市民として、そういうルールができることに賛成する。あるいはルールができそうな状況の中で、案に意見があるなら、パブコメで意見をするとか。あるいはそういうルールが全然できなさそうであれば、作るべきだと声を上げる。これが、市民の重要な役目であって、ヨーロッパの市民は多分そういう

ことをやっている人が多いのだと思います。そういうイメージですね。

Q（区職員）時期的なことを考えたときに、やはりルール化も進めないと社会変革が間に合わないという感覚はお持ちでいらっしゃいますか？

江守さん

はい、持っています。やはり個人の選択の範囲だと、たまたま関心を持った人、たまたま口コミで聞いた人になりますよね。

ただ、やはりルール化するうえでは、ある程度の人々の支持がないと、ということはあるので、関心を持つ人を増やしていかなければならないのでしょうけど、最終的には、それがルールになって当たり前になっていくということ、なるべく早くしないと。

本当に今、求められている1.5℃で温暖化を止めるような排出削減ペースというのは、これは世界全体の話ですが、今の取組みでは程遠い訳です。全然良い線もいっていないわけです。まあ国によってははいっていますが。

これは世界全体なので。本当はそのことを考えると、途上国が排出量を減らしながら発展できるか、というところがものすごく大きくて、まだそういう状況になっていないのです。今日は詳しくは触れませんが。しかしながら、本当に世界で排出量が減らないといけないので、そのことについても関心をもって欲しいなと思っています。

規制によっては我慢しなきゃいけない規制はありますが、断熱や太陽光パネルは得する規制ですよ。皆が知らないからルール化するけれども、したらその方が皆いいと言いますよという類のものではないかと思うのです。

話を聞いていると、高断熱の住宅にした方が、初期費用としての施工費はかかりますが、光熱費が減るので、ランニングコストで元が取れるだろうし。もちろん快適だし健康に良いし、資産価値も下がりにくいし、そのくらい住む人にとって良いのだったら、行政がそのことを理解して、進めることができれば、早くやった方が良いわけですよ。太陽光パネルもたぶんそうですよね。良い規制を早く入れていただきたいと思います。

（区職員）変わってみれば、それが当たり前になっているという常識は、そのきっかけをつくるために最初は一定程度の合意形成がいると思いますが、そこさえ作れば、そこからドミノ倒しの常識を変えることができるということですね。おっしゃる通りで、そういうことを踏まえながら取り組んでいければと改めて思った次第です。今日は有難うございました。

以上（インタビュー：2024年2月5日、東京大学本郷キャンパスにて）